

〈研究ノート〉

福祉系学部大学生における障害者ダンスへの理解 — ビデオダンス作品 “The Cost of Living” 鑑賞を通して —

松岡 綾葉 片山 昭義 植屋 悦男

要約

イギリス社会の諸問題をテーマとし、障害者ダンサーの出演するビデオダンス作品 “The Cost of Living” (2003) を将来福祉の現場に携わる福祉系学部生に鑑賞してもらい、質問紙調査を通して、障害者のダンスについてどのような理解が得られるか調査し、また、ビデオダンスが障害者ダンスの理解への導入として効果的な役割を果たすのか検討することを目的とした。

結果として、学生たちは障害者の訓練された高度なダンスに高い評価・感動を示し、新たな価値を見出したことが示唆された。また障害者にとってのダンスが身体能力の回復・向上につながり、自立や生きがいになるのではとの見方を得られた。よって、学生たちはビデオダンスを通じて障害者ダンスに対する一定の理解を得、ダンスの持つ障害者支援の可能性に期待していることが示唆された。

キーワード ビデオダンス、障害者、ダンス、ロイド・ニューソン、福祉

目次

1. 背景・目的
2. 質問紙調査の概要
3. 調査結果の概要と考察
 - 3.1 質問項目①より
 - 3.2 質問項目②より
4. 結論
5. 課題と今後の展望

1. 背景・目的

ダンスの映像作品であるビデオダンス (video dance) は、ダンスの記録媒体としての映像に留まらず、ダンスと映像の双方の技法と創造性で以て成立する表現形態である^[1]。ビデオダンスは1960年代、ポストモダンダンスの隆盛の中でダンスと映像の本格的な探求が始められ、舞台上では実現不可能な要素であるカメラの視点を操作することで舞踊表現の可能性を切り開いてきた。現在ではビデオダンスに特化したフェスティバルやコンペティション

が世界中で数多く開催され、また著名な振付家の多くがビデオダンス製作に取り組み、舞台作品とは異なるダンスへのアプローチを試みるなど、目覚ましい発展を遂げている。

数多くあるビデオダンス作品の中でもイギリスのダンスカンパニー DV8 Physical Theatreによる“The Cost of Living” (2003)^[2]は、映画のようなドラマトゥルギーを持ち、障害者・労働階級従事者・同性愛者などに対する差別と偏見のまなざしの中に生きる人々を、ダンスを通して描いた作品である。社会的な弱者とされる彼らが台詞を交えながら踊るダンスには差別・階級社会に対する問いかけや怒り、社会に対する強い抵抗が表現され、ロケーションやカメラワークも相まってダンスと映像の技法が効果的に表れた作品である。監督・振付を行ったDV8 Physical Theatre主宰のロイド・ニューソン (Lloyd Newson 1962-) はイギリスを代表する振付家の一人であり、本作品は数多くの映画祭で受賞歴^[3]を持ち、世界的な評価も高い。

作品中展開されるダンスの中でも下肢に欠損を持つデヴィッドという障害者とその他の健常者のダンサーによるダンスシーンは非常に印象深い。デヴィッドのダンスには下肢が無いことに対する違和感が全く無く、むしろ彼の身体的特徴を生かし、健常者では不可能な動きやポーズを遺憾無く発揮していた。このことは、プロフェッショナルダンサーは五体満足であることが前提とされるダンスの常識に疑問を投げかけ、障害者のダンスに価値を見出す舞踊の新たな可能性を切り開くのではないかと考える。この仮説検証のために、まずは作品鑑賞を通して障害者が踊るダンスに対し、福祉を学ぶ学生にどのような影響をもたらすのか明らかにする必要性を感じた。

そこで、本研究では“The Cost of Living”の鑑賞者に対し、障害者のダンスについてどのような理解が得られるか検証を試みることにした。鑑賞してもらった対象者は、福祉の知識を有し、将来福祉の現場に携わる福祉系学部の学生たちであり、質問紙調査を通して所感を得た。そしてビデオダンスが障害者ダンスの理解への導入として効果的な役割を果たすか検討し、考察することを目的とした。

2. 質問紙調査の概要

1) 調査対象

福祉系学部の大学3・4年生男女合計20人

2) 調査方法

作品鑑賞後、質問紙配布・回収

3) 調査日

平成23年4月30日

4) 調査内容

以下の二つの質問項目について自由記述形式で書いてもらった。

- ①障害者というフィルターをのぞいた上で、ダンスを見た感想を述べてください。
- ②身体の不自由な障害者がダンス（身体表現）を行うことで、障害者の人々にどのような

効果をもたらすことができると考えますか？

①では、障害者が踊ることそのものを感動秘話としてすごいと感じてしまうことを避けるために、将来福祉の現場を志す学生たちにあえて障害者と健常者を同じラインに立たせた見方で鑑賞させるために設けた質問である。②では、学生たちが今後障害者と関わっていく上でダンスをどのように捉えているか、ダンスの効果に対してどのような理解を得ているか探るための質問である。

3. 調査結果の概要と考察

質問紙の調査は、質問項目①・②にそれぞれ書かれた記述内容をカテゴライズし、分析を行った。

3.1 質問項目①より

カテゴライズの結果、大きく三つの内容に区分された。記述の代表例を「 」をつけて下に挙げる。なお、()の英字は回答者のイニシャルである。

(1) 感動した・すごい

- ・「障害者と言われなければ健常者だと思えるようなダンスだった。」(A.Y.)
- ・「障害者であるというフィルターを除いたとしても、私にはできないことをやっているからやはり感心する。」(Y.T.)
- ・「障害があるからすごいのではなく、ダンサーとしてすごいと思いました。」(Y.K.)

最も多かった記述が障害者のダンスに対して素直に「感動した・すごい」と高い評価を寄せるものである。ただ障害者が踊っているから「すごい」のではなく、訓練を積んだダンスの技術が障害の有無を超えて純粋に「すごい」と思わせるものであったという。

このように高度に訓練されたダンスが、障害の垣根を超えて学生たちの心を打つものであることが示唆された。

(2) 健常者に比肩する

- ・「プロのダンサーと特に変わりなくダンスをしているように見える。」(Y.S.)
- ・「プロのダンサーと引けを取らないほどのショーだと思った。」(Y.K.)

次に多くみられた所感は、「健常者のダンサーと変わらない」、「普通の人みたいな」ダンスであったことである。ダンスシーンはどれも健常者と共に踊られるため、学生たちは自ずと比較して鑑賞したものと思われるが、デヴィッドが健常者のダンサーに遜色無いほどの技術と表現力を持っていたことを学生たちは感じ取ったことが分かる。

(3) 障害の垣根を超えた芸術

- ・「芸術に障害などという言葉は無く、逆に障害だからどうした？と思います。」(T.K.)
- ・「健常者と同じような一つの芸術である感じた。」(S.M.)

以上のように、障害の有無は関係なく、純粋に芸術作品として評価している記述が散見された。「芸術性が高いために障害ということを忘れて見てしまった。」(S.H.)という記述も

あったが、これはダンサーたちの質が高いことのみならず、構成・振付・演出や映像技法などにおいても秀でていたため、もたらされた効果であると考えられる。そのことについては、舞踊評論家の武藤が「映像作品としてよく出来ている。しかも単なる福祉・啓蒙ではない。」^[4]と評したことからも明らかである。芸術は障害を越えてすべてにおいて平等であり、優れた芸術作品を前にしてこれは障害者のダンスであるということをわざわざ考える必要は無いということを見出した記述であると考えられる。

その他、「障害がなかったらできない動きであった。」のように、障害者にしかできない独創的で斬新な動きに注目した記述も見られ、肢体が不自由であることによってダンスの新たな一面を見つけたことが分かる。

3.2 質問項目②より

(1) 生きがい・生きる希望

・「障害者だから何もできないのではなく、やればできることをあらわしていると思います。前向きに生きることを教えてくれると思います。」(A.Y.)

・「積極的な行動が社会参加や生きる希望に繋がると思います。」(S.H.)

最も多く寄せられた言葉は、「夢」・「生きがい」・「生きる目標」・「活気・やる気」などの生きることに對する積極的な姿勢を示すものであった。ダンスを行うことで、障害者に前向きに楽しく生活を送ってもらうことができるのではと考える意見が多かった。

(2) 自信・自立

・「ダンスをやり遂げた達成感から『自分にもできることがある』という自信につながる」(T.M.)

・「障害があってもダンスはできるということを知り、自信を持つことができると思います。そこから自立にもつながると思います。」(Y.T.)

・「自信をつけてこれからの人生を明るく過ごせるのではないか。」(R.M.)

次に多かったのは、ダンスを習得することで自分にも何かできることがあるという自信を芽生えさせ、それがゆくゆくは障害者の自立へと向かっていくのではないかという意見である。今後、障害者に生きる自信を持たせ、自立支援を行っていくであろう学生たちは、ダンスがその支援に寄与する一つの活動であると認識していることが分かる。

(3) 健康面の向上

・「うまく使うことのできない手や足を動かすので、筋肉に良い刺激を与えると思う。」(Y.S.)

・「運動にもつながるし、健康にもいいと思いました。」(Y.T.)

以上示されるように、ダンスが健康面に及ぼす影響に注目した意見が散見され、ダンスがもたらす身体的な効果を見出されたことが示唆された。スポーツやその他レクリエーションのように、特定の部位や動きによる規制が無く、ダンスでは障害の程度に応じた動きを自由に作りアレンジすることが可能である。それによって日常生活ではうまく使えない手足も、

ダンスでは動ける範囲で楽しく動かすことで「良い刺激」がもたらされることに注目したのではないかと考える。また、「ダンスって表現力なんだなと感じました。」(K.W.)とあるように、身体を使って自分を表現することで情操面に与える効果について言及した記述も見られた。

4. 結論

以上の調査結果及び考察により、質問項目①からは、多くの学生が障害の有無を超えて感動し、障害者のダンスが健常者のダンスと同じように高い技術と表現力を持っていると評価したことが分かった。また、本作を障害者と健常者の垣根を超えた一つの芸術作品として認識し、「障害があるから…」といった考えの余地無く見入ってしまったことが明らかとなった。学生たちは、障害者の高度なダンスと表現力によって、一見困難と思われる障害者のダンスが、実は健常者との差を全く感じさせないくらいの感動をもたらしうることを実感したと考えられる。以上から、学生たちが障害者のダンスに対して感動し、新たな価値を見出したことが示唆された。このように障害者のダンスに対して理解を得られたことは、鑑賞に用いた本作がビデオダンスとして世界的に高い評価を得、また、デヴィッドが優れたダンサーであるからだろうと考えられた。

そして、質問項目②からは、障害者がダンスを行うことで、彼らが生きがいや生きる希望、そして自信を見出し、それがひいては前向きに生活を送り、自立につながっていくと多くの学生が考えていることが明らかとなった。また、健康面における影響にも注目し、ダンスによって身体能力の向上やリハビリにつながるのではとの見方が見られた。以上のことから、学生たちはダンスが心身の向上に大きな効果を発揮すると考え、障害者支援におけるダンスの可能性を発見できたことが示唆された。これらのことは、作品中の障害者ダンサーが、健常者に比肩するほどのダンス技術を身につけ、いきいきとダンスを踊っている様子から感じたものであろうと考える。

以上の考察を通して、学生たちはビデオダンスを通じて障害者ダンスに対する一定の理解を得、ダンスの持つ障害者支援の可能性に期待しているものと考えられる。本研究における鑑賞を導入として、将来学生たちが障害者のダンスに触れたり、あるいは支援活動の一環としてダンスに取り組んでくれることを期待したい。

5. 課題と今後の展望

本研究ではビデオダンスという素材のみを使用したため、得られた結果がビデオダンス由来のものであるとは断言することはできない。そのためには、舞台作品とビデオダンスの双方を用い、それぞれがもたらす障害者ダンスへの理解を比較検討する必要がある。舞台作品で実際に現前するダンサーがもたらす迫力と、ビデオダンスで駆使されたカメラワークや編集による効果では見る者の知覚内容が違ってくると考えられるからである。また、鑑賞前後にそれぞれ質問紙調査を行い、鑑賞を通して障害者のダンスに対する理解がどのように変化



図1, 2 “The Cost of Living” より

するか綿密な調査も必要である。以上の課題を踏まえ、本作の鑑賞を通して障害者ダンスへの理解とその可能性の気づきをもたらす調査を継続していく予定である。

[注]

[1] 筆者による定義は「映像とダンスによる創造的な芸術作品」(松岡綾葉, 2009.「映像化された身体を探る—DV8 Physical Theatre “The Cost of Living” (2003) 作品分析より—」第60回舞踊学会大会)である。

[2] The Cost of Living (邦題「生きるためのコスト」) 2003年、DV8 Physical Theatre
 監督…Lloyd Newson
 出演…Jose Maria Alves, Gabriel Castillo, Robin Dingemans,
 Tom Hodgson, Eddie Kay, Tanja Liedtke, Eddie Nixon, Kareena Oates,
 Rowan Thorpe, David Toole, Vivien Wood

声…John Avery

音楽…Nick Hooper, Paul Charlier, Jonathan Cooper

音楽スーパーバイザー…Ivan Chandler

プロダクションデザイナー…Suzie Davies

編集…Stuart Briggs

撮影監督…Cameron Barnett

製作…Nikki Weston

ストーリー

イギリスの昔ながらのリゾート地、ノーフォーク沿岸のクローマー。夏の行楽シーズンが終わりに近づき、閑散とした空気が町を漂う。ストリート・パフォーマーのエディーとデヴィッドは、そんな現実に幻滅している。エディーは鼻っぺしが強く、正義感にあふれる正直者。デヴィッドは足のないダンサーで、彼を見ていると、優雅であるとか完璧であるとはどういうことなのかを考えさせられる。デヴィッドは穏やかな性格だが、体の障害や社会の偏見には屈しないとかたく決意している。交錯する場面を通して、エディーとデヴィッドが人生と折り合いをつけ、人々との出会いと別れをくり返ししながら、一日一日を生きていく姿が描かれる。(岸本泰, 2005. “The Cost of Living” 紹介文 (ウーファーアートドキュメンタリー <http://www.ufer.co.jp/works/dv8/index.html> 2009.2.10.より)

[3] 受賞歴は以下の通り

- ・ Special mention : Look & Roll Festival 2008, Basel
- ・ All About Dance Award : Milano Doc Festival 2007, Milan
- ・ Choreography Media Honors Award : Dance Camera West 2007, Los Angeles
- ・ Best of Festival : Picture This Film Festival 2006, Calgary
- ・ Time Out Live Award : Outstanding Achievement in Dance 2006, London
- ・ Prix Italia : 2005, Milan
- ・ Cinedans audience award : 2005, Amsterdam
- ・ IMZ Dance Screen 2005, : Best Camera Re-work, Brighton
- ・ Rose d'Or 2005, : Arts & Specials, Lucerne
- ・ Sette Jury Prize : Montreal Festival for Films on Art 2005, Montreal
- ・ Audience Choice Award : Festival of Dance Film for the Camera 2005, Brasilia
- ・ Jury Prize : Dance on Camera Festival 2005, New York
- ・ Best of VideoDance audience award : VideoDance 2004, Athens
- ・ Paula Citron Award : Moving Pictures Festival 2004, Toronto
- ・ NOW Audience Choice Award : Moving Pictures Festival 2004, Toronto

[4] 武藤大祐. 2006. dm_on_web.video dance 2006 session3

<http://blog.goo.ne.jp/d-muto/e/e019d018e44d285b5348b93988d58220> 2009.1.17.

Summary

A Study of Understanding for Disabled People Dance through Video Dance

Ayaha Matsuoka
Akiyoshi Katayama
Etsuo Ueya

The purpose of this survey is to verify the effectiveness of understanding disabled people dance through watching video dance. In this survey, college students who are major in public welfare watched one of master pieces of video dance by Lloyd Newson (1962-): "The Cost of Living" in which disabled dancer dances and British social problems are dealt with. Through questionnaire to the students, they highly appreciate and value dance by disabled people. They also regard that dancing give disabled people rehabilitation and health, furthermore bring self-sustainability or meaningful life.

Therefore, it is suggested that the students understood of disabled people's dance and expected dance to support them. In conclusion, Video dance is an effective educational tool for welfare students and gives a new value to dance.

Keywords Video Dance, Disabled People, People with Disabilities,
Welfare, The Cost of Living

(2011年11月17日受領)